

三、反宗教々育

また、右の國教分離が決定されたと同じ四月二日に、あらゆる宗教的表象、偶像、及び信仰を思ひ出させるやうな一切のものを、學校から取り去ることが決定された。學校では祈禱することが禁止された。學校なるものは、『個人の信仰に關する』ことに關與すべからずとされた。そして此の一般的布告は、漸次に實施された。(註一)

既に、巴里コンミュンの成立後直ちに、三月二十三日の夜、第一インターナショナルの巴里地區聯合評議員會は、その決定的な會議を持つて、コンミュンの向ふべき方向に就て重要な宣言を發したが、その中には明かに『非宗教的にして完全なる無料教育』の要求が掲げられた。(註二)

そして、それまで殆んどカトリック教會によつて獨占されてゐた國民教育をば、完全に非宗教化(ライシゼー)してしまつた。

即ち巴里コンミュンは、學校に於ける『キリスト教貧困兒童教育會』なるものの會員の

支配をば、完全に一掃してしまつた。そしてカトリック教會と、ナポレオン三世（一八七〇年九月二日、麾下の將卒によつて投獄さるゝ）の時代に國家の特別保護を享けてゐた所の其の傳道組合の掌中から、新しい時代の人々の教育を奪ひ返した。

かうした教育方針を取るに當つて、コンミュンは勞働者階級の要求に一致した一般的政治要素を取り入れることにしたのであつた。そしてそれは、ブルジョアジのイデオロギ―や、迷信や偏見の傳統や、盲目的な信仰などを決定的に斷ち切つてしまつた。

五月十八日には巴里コンミュンは次の如き非宗教々育促進の布告をさへ出してゐる――

『教育委員會の提案により、

コンミュンは次の如く決定す――

コンミュンの命令にも拘らず、今尙ほ修道僧によつて經營されつつある凡ゆる教育施設の表を、二十四時間以内に作製すること。

非宗教々育に關するコンミュンの命令が、未だ執行せられざる區より、市會へ選出せらるるコンミュン議員の氏名を、毎日、公報へ掲載すること。

一八七一年五月十八日

巴里コンミュン』（註三）

かくして教會の經營になる學校の廢止は、非宗教々育の導入に反對した所の司教や、修道僧や、その他の凡ての宗教的諸要素の解體につれて行はれた。明かに、彼等の教育事業は、チエールの反動政府の強化を意味してゐた。だが、彼等宗教的諸要素は、教育委員會の命令によつて、コンミュン治下の學校からは、斷然と遠ざけられたのであつた。

また、どの區役所も、教育上の新しい責任者たちに對して、宗教上の書物や、聖者たちの畫像や、十字架などを、學校から取り上げるように指令を發した。教員たちは、宗教上の合唱の代りに、學校の生徒たちによつて編制された××的合唱を組織した。

(註一) マルクス『巴里コンミュン論』へのエンゲルスの序文。

(註二) クラルテ社版「巴里コンミュン史料集」一九頁。

(註三) 同書、五〇頁。

四、農民と宗教

マルクスが云つたやうに、コンミュンが、農民に向つて『吾々の勝利は諸君の希望である』と呼びかけたのは、完全に正しかつた（『巴里コンミュン論』五五頁）。

『コンミュンは農民から血税を取除き、農民に安上りの政府を與へ、農民の吸血鬼たる公證人、辯護士、執達吏、及び其他の法曹的吸血鬼共を、農民自身によつて選出され、農民に對して責任を有する有給のコンミュンの官吏に轉化せしめた。コンミュンは、農民を、田畑の番人や憲兵や知事の専制から解放せんとした。コンミュンは、僧侶による愚鈍化に代へるに、學校教師による啓蒙を以つてせんとした。そして、フランスの農民は、就中、勘定高い人間である。農民たちは、僧侶への支拂ひは、收稅吏から取立てられる代りに、教會員の信心深い衝動の自由意思による實行にのみ頼るべきだといふことを、極めて理性的に感づいた。かくの如きが、コンミュンの支配の——而してその支配のみの——フランス農民に豫期せしめた恩恵であつた』(同書、五六頁)。

五、僧侶の人質

巴里コンミュンは、ヴェルサイユに逃亡したブルジョア政府の『無茶苦茶な慘忍に對する最後の均衡たる人質』(マルクス)を取つたのであつた。即ち、コンミュンは人質の逮捕

を決議し、四月三日から十六日にかけて、パリの大司教ジョルジュ・ダルボワを初め、若干名の僧侶及び一般人を人質として逮捕した。

而してコンミュンは、當時チエールの手に捕へられてゐた唯一人のブランキーに對して、大司教とおまけに僧侶の全體とを交換しようとして、幾度もしく申込んだのである。チエールはそれを頑強に拒絶した。チエールはブランキーを渡せば、コンミュンに首領を與へることになるが、一方大司教の如きは、死屍となつた方が、却つて最も良くチエールの目的に役立つことを知つてゐた。マルクスが云つた如く、だからして、大司教ダルボワの眞の虐殺者はチエールであつたのだ。

かくして人質の生命は、ヴルエサイユ側に於ける捕虜の繼續的射殺によつて幾度もしく失はれた。

今尙ほ巴里のオグゾ街には、かかる『人質屋敷』の遺跡があつて、毎年、プロレタリア側の巴里コンミュン祭に對抗して、カトリック的な反動的追弔會を舉行してゐる。

だが、コンミュンは矢鱈に人質を殺した譯ではなかつた。有名なコンミュンの委員ヴア

ルランの如きは、オグゾ街の人質を救はうとしたものである。要するに、それはヴェルサ
イユ側の殺戮に比すれば殆んど問題にならぬものであつた。

第三章 ソヴェエト同盟に於ける反宗教運動

一、序 説

一九一七年十一月七日の革命は、強大なプロレタリア政權としてのソヴェエト政府の樹立によつて、廣大なロシアに、世界で最初のプロレタリア國家を建設したものである。

プロレタリアートの諸政策、諸施設は、今や廣汎にソヴェエト同盟に於て實現されつつあるのである。

一九二八年に開始された五ヶ年計畫は、豊富な天然資源の開発によつて、物質的基礎の充實を來し、かくして文化建設の方面にも著大な進歩を示しつつある。

かうしたプロレタリアートの文化建設の過程に於て、反宗教運動は、いよ／＼その重要性を高めつつある。従つて、かかる運動が、如何に展開されつつあるかを究明することは讀者諸君にとつても極めて興味あることと思ふ。以下、主要な諸點に就て、若干記述の歩

を進めよう。

二、ソヴェエト革命と宗教

——宗教に関する諸規定——

ソヴェエト政權は、革命の翌年、即ち一九一八年の一月二十三日に、有名な『良心と宗教團體の自由』なる布告を發布した。それは宗教に對する最初のソヴェエトの根本規定として、非常に重要な布告であるからして、以下にその全文を掲げることになしよう。

良心と宗教團體の自由

一九一八年一月二十三日の布告

- 一、教會を國家から分離すること。
- 二、共和國內に於いて良心の自由を制限し、或は妨害するが如き、地方的法令の如何なる種類のものをも布告することを禁じ、その信ずる所の宗派の相違によつて、市民に優先權又は特權を與ふることを禁止すること。

三、各市民は如何なる宗教に歸依してもよいし、歸依しなくてもよい。そして其によつて、今まで法律の適用に際して爲されてゐた如何なる制限をも廢止する。

附り、市民の宗教的歸依又は無信仰に關する記入を、總ての公けの書類から排除すること。

四、總ての國家機能及び其他の公的並びに社會的の機能は、法律的には、如何なる宗教上の慣習或は儀式によつても伴はれてはならぬ。

五、宗教的慣習を自由に實行することは、ソヴェート共和國の市民の權利を侵害し、或は公衆の平和を亂さざる範圍内に於ては、安全に保護される。そして地方當局は、かかる場合に於て、公安を保全するため、すべての必要な手段を講ずる權限を有してゐる。

六、何人も宗教的理由のために彼の私的義務を避けることが出来ない。他の者によつて私的奉仕の一つの形式に置換する條件のものを除いては、各々別々の場合に於て、裁判所の決定によつて許されねばならない。

七、宗教的誓ひは廢止される。若し必要な場合には、ただ嚴肅なる約束がなされる。

八、戸籍はただ當局、即ち結婚局及び出産局によつて記録される。

九、學校は教會と分離されねばならぬ。宗教的信仰の告白文の教育は、世俗的問題を教育する國立、公立又は私立の學校ではなされない。私人的職掌としては、人々に宗教は教へられてもよい。

十、總ての教會及び宗教的團體は、有志的團體及び組合に對して與へられてゐる一般的權限に従

ふ。そして國家から、又は地方自治體から、特權或は補助金を受け得ない。

十一、教會及び宗教團體の利益のために、強制的徴收金或は賦課をなすことは、その會員にその團體のために刑罰を科し、或は無理押しつけの方法を採ることと同様に、許可されない。

十二、教會及び宗教團體は、財産を私有する権利を持たない。また何ら法人の權限を持たない。

十三、現存する教會及び宗教團體の總ての財産は、民衆の財産であると宣言される。然し宗教儀式に特に必要な建物又は物品は、國家當局又は地方當局の特別な布告によつて、當該宗教團體に自由なる使用を許可すること。

×

また、一九二五年のロシア××黨第十五回大會では、次の如き宗教宣傳の新政策に関する決議文が通過した。

「教會堂、回教會堂、ユダヤ人教會、祈禱所を閉鎖するやうな行政的手段によつて、宗教的偏見と闘ふことは、止めねばならぬ。農村に於ける反宗教宣傳は、主として農民の熟知する事項の唯物論的説明でなければならぬ。霰、雨、暴風、旱魃の原因や、害虫の襲來や、土壤の性質や、肥料の役目などを説明することは、最良の反宗教宣傳である。かくの如き宣傳の中心は、學校であり、また黨組織の統制下にある輕便讀書室であるべきである。

「信者たちの宗教的感情を傷けはしないかと云ふことに特に注意を拂ふべきである。種々の宗教的感情に對する勝利は、多年の撻みなき教育活動によつてのみ得られるものである。かやうな注意は、東部の共和國及び地方に於て特に必要である。

「獨立教派に對しては、特に周到な注意を拂はねばならぬ。彼等の多數は、ツアールの專制下で、最も殘忍な虐待を受けてゐたので、大なる活動が認められる。如才なき接觸に依つて、ソヴェート活動の運河に彼等を導き込むことが、何よりも必要である。それは獨立教派の中には、一つの大きな經濟的文化的要素が存するからである。獨立教派の大衆を考へると、その事業は大なる意義を持つ。この問題は、地方的條件に關聯して解決されなければならぬ。」

×

また一九二五年五月十一日に發布されたソヴェート社會主義共和國聯邦の根本法たるソヴェート憲法には、その第十三條に、信教の自由、布教の自由を認め、特に反宗教宣傳の自由を附加してゐる。

即ち、その條文と云ふのは、次の如くである。

「第十三條 勞働者に良心の事實上の自由を保證せんが爲め、教會を國家より、而して學校を教會

より分離する。そして宗教的並びに反宗教宣傳は、之を凡ての人民に附與す。」

だが、此の條項は、一九二九年四月の憲法修正によつて、『宗教的宣傳』が除去され、反宗教宣傳は元のままに公認され、むしろ獎勵さるるやうな結果となるに至つた。従つて此の改正によつて、反宗教運動は一層組織的なものとなつたのである。(註)

(註) 此の憲法修正と共に、布教の自由を制限した新法令が制定された。その要綱は次の如きものであつた。

一、布教を許すべきものとしての宗教の地位を憲法より抹殺し、反宗教宣傳を認む。

二、宗教團體が所屬信徒に物質的援助を與へることを禁じ、宗教、文學、裁縫、其他如何なる課目に關しても、講習會を開くことを得ず。

三、官許の特定教會堂以外、公私の敷地内に於ける宗教的儀式を禁ず。而して官許の教會堂は政府より賃貸されたものと見做す。

四、僧侶の衣服(法衣)は國家の財産とす。

五、僧侶はその住居地域以外若くは右地域内の唯一の教會以外に於て教務を遂行するを得ず。

かくして新しい『ソヴェート同盟宗教團體法』が制定されたのである。そして宗教及び寺院の社會的進出に對して極度に制限を加へてあるのである。

三、戰鬪的無神論者同盟

ソヴェート同盟に於ける、反宗教運動の中心團體は、戰鬪的無神論者同盟 (Unio de Militantaj Ateistoj—UMA と略記す) である。

此の同盟は、一九二五年四月に創立されたものである。一九三二年の統計によれば、全ソヴェート同盟に六萬の細胞を持ち、會員數五百萬を有してゐる。

今、最近の報告書 (Unio de Militantaj Ateistoj en USSR kaj ĝia Laboro, Mosko, 1931.) によつて、その當初からの發展の數字を示せば、次の如くである (同書三〇頁)。

年次	細胞數	會員數
一九二六	二、四二一	八七、〇三三
一九二七	三、一一一	一三八、四〇二
一九二九	八、九二八	四六五、四九八
一九三〇	約三五、〇〇〇	一一、〇〇〇、〇〇〇

一九三一（一月一日）

五〇、〇〇〇

三、五〇〇、〇〇〇

一九三一（五月一日）

約六〇、〇〇〇

五、〇〇〇、〇〇〇

そして此の同盟は、理論的機關誌として『ウオインストウユスチイ・アテイズム』（戦闘的無神論）を持ち、また青少年大衆のための『若き無神論者』を持ち、また理論的月刊雑誌として『反宗教者』（アンチレリデオズニク）を持ち、大衆雑誌として『無神論者』（ベズボーヂユニク）を、また宣傳用新聞として同名の『無神論者』（ベズボーヂユニク）を持つて居る。その他、地方的な機關新聞雑誌を合せて、目下二十三種の反宗教定期刊行物を出してゐる。尙ほ前記『戦闘的無神論』には、ドイツ文とエスペラント文の附録が出版されてゐる。これに見ても、ソヴエート同盟に於ける反宗教宣傳は、極めて大規模なものであると云はねばならぬ。

勿論、此の同盟はプロレタリア自由思想家インターナショナル（次章参照）に加盟し、そのロシア支部として最も有力なものである。

ソヴエート同盟に於ける反宗教運動は、此の同盟の指導下にあつて、最も組織的運動を

進めてゐて、その國際的影響は甚だ大なるものがある。ローマ法王を中心として叫ばれた『反ソヴェート十字軍』の如きは、正にそれに対する反對現象として、キリスト教的ブルジョア諸國に相當の反響を呼び起してゐる。

此の同盟は、目下、非常な勢力を以て發展しつつあるものの如くである。

茲にその最近のスローガンを示せば次の如くである。

- 一、無神論者の全力を産業化の遂行へ！
- 二、無神論者は一人も突撃隊と社會主義競争の外側にあるな！
- 三、絶えざる農業經營の集團化のために、そして富農とその掩護物たる宗教に對して闘へ！
- 四、教育の普及のために、そして無智と宗教に對して闘へ！
- 五、「戰鬪的無神論者同盟」の細胞なき集團農場を一つもあらしめるな！
- 六、愛國主義、國家的制限に對して闘へ！ 無神論の國際的教育のために闘へ！
- 七、クリスマスの代りに勞働の組織デーを！
- 八、反宗教闘争に於ける日和見主義、妥協主義、及び極左歪曲化を排撃せよ！
- 九、クリスマスと泥酔と缺勤に對して闘へ！ 勞働の突撃的テンポのために闘へ！
- 一〇、學校を××主義的無神論教育の溶鑛爐たらしめよ！

一一、宗教的文盲に對して闘へ！ マルクス主義としてのレーニン主義のために闘へ！

一二、文化革命のために、そして古き奴隸的習慣に對して闘へ！

一三、社會主義建設への積極的參加によつて反宗教闘争を強化せよ！

一四、クリスマスに一人の缺勤者も出さな！

一五、ローマ法王の反ソヴェート戦争の宣傳に對しては、ソヴェート同盟の防禦力と赤衛軍の強化

とを以つて答へよ！

一六、社會主義建設を妨害する宗教の足枷をぶちこわせ！

一七、反宗教闘争にピオニールを動員せよ！

全露戰闘的無神論者同盟

吾々は、かうした實踐的な數々のスローガンの間から、色々な生きた事實と教訓とを學び取ることが出来るであらう。

四、コルホーズ（共同農場）と反宗教運動

ソヴェート同盟に於ける反宗教運動は、その對象として、特に農民層、婦人層、青少年層をねらつてゐる。

過去の惰性によつて神を求むる老人層に對しては、敢て教會への出入を阻止せざるも、比較的感化され易い婦人や青少年が教會に接近することは、非常に警戒されてゐる。

特に農民は、どこの國でも、一番に宗教的な民衆である。だからこそ、ソヴェートの戰鬥的無神論者同盟は、特に農民に向つて強力な反宗教宣傳を行つてゐるのである。

ところで、ソヴェート同盟の農村に於ては、目下、全く新しい生活形態が展開されつつある。即ち、それはコルホーズ（共同農場）の運動である。それは、古い個人主義的な農村生活を打破して、新しい社會主義的な農村生活を建設するものである。

従つてソヴェート同盟に於ける反宗教運動は、社會主義社會建設の運動の一部門として、特に農村に於けるコルホーズ運動と密接な關連の下に行はれてゐるのである。吾々はその實狀の一斑を、ソヴェート映畫『春』や『大地』などで瞥見するを得た（後出『ソヴェート映畫と反宗教宣傳』参照）。

ソヴェート農村に於ける五ヶ年計畫の進展と、そのコルホーズ運動とは、先づ、文化水準の低い農民層に對する反宗教宣傳を絶對的に必要としてゐる。そこでは中世紀的な宗教

の影響下にある農民大衆をして、何よりも先づ、近代科學の洗禮を充分に受けさせねばならない。然らざる限り、農村に於ける社會主義建設は、全く薄弱なものとなるのである。

都市に於ける寺院清算運動（寺院のセツツルメント化）は、農村に於いても、その農村共同住宅の建設と共に、次第に實現されつつある。尙ほ特に「無神論者コルホーズ」なるものがあつて、此の運動の先驅をしてゐる。それは一九三一五月一日の報告によると、既に三百コルホーズ以上を算してゐる有様である（前掲報告書、三二頁）。

農村に特に多くの信者を持つ日本の佛教各宗各派の如きは、此の運動に就て、特に關心を持つものとなるであらう。

五、ピオニール（無産少年團）と反宗教運動

前にも一寸觸れたように、反宗教運動の大きな對象の一つは、青少年層であらねばならぬ。彼ら若人こそは、最も強く、宗教的感化を感ずるものであるからである。

それ故に、ソヴェート同盟に於ては、老人は多く咎めないが、若き世代に對しては徹底

的な反宗教イデオロギーを注入するのである。

元來、ソヴェート同盟の今日の國民教育は、非宗教々育てである。宗教は完全に教育の領域から排除されてしまつてゐる。従つて、ソヴェートの兒童は、キリスト教的資本主義諸國に於けるが如くに、宗教教育を強制されてはゐない。

所で、ソヴェート同盟の指導的・前衛的少年組織たるピオニール（無産少年團）は、積極的に反宗教運動のカンパニヤに闘つてゐるものである。従つて、そのために最も組織的な反宗教々育てが、彼らに對して施されるのである。最近、戰鬪的無神論者同盟は、その宣傳者養成のための學校に、ピオニール部を特設するに至つた。

今、参考のために、そのソヴェート戰鬪的無神論者同盟學校ピオニール部が篇成した反宗教々程を示すならば、それは次の如くである。

第一、社會主義建設と反宗教鬪争

第二、少年反宗教運動、その目的と任務

第三、なぜ人は神を信ずるか（宗教とは何か、その起原、發生、階級性、宗教の反共產性、其他）

第四、科學と宗教（科學と宗教との對立、及び過去現在に於けるその鬭争）

第五、宗教と新人養成問題（階級的鬭士及びインタナショナルナリスト養成、婦人解放）

第六、宗教とソヴェート（最も廣く行はれてゐる宗教及び諸宗教の勢力、特質、反社會主義建設性）

第七、資本主義諸國に於ける諸宗教（キリスト教社會主義、カトリック政府、學校問題、革命運動の擡頭と十字軍）

第八、殖民地の宗教（ミツション、カンヂ主義、宗教的對立の情勢）

さて、以上の習得法としては、無神論博物館の參觀、信者との問答、夜間討論、新聞などであつて、尙ほ實習を行はしめる。

生徒は三科に分れ、第一科は夜間討論會指導、第二科は壁新聞編輯、反宗教問答會指導、第三科は書籍新聞精讀である。生徒は以上の三科を終了した後、學校、コルホーズ、住宅組合等に進出するやうに組織されるのである。

かうした若き世代に對する反宗教的な働きかけは、けだし非常な功を奏してゐるものゝ如くである。

六、ソヴェート映畫と反宗教宣傳

一

ブルジョア諸國で製作せられるフィルムは、すべて皆、多かれ少かれ中世紀的な宗教的蒙昧さを取り入れてゐる。

慣習的な宗教儀式の傳統をアプリアリに肯定し、反映せしめてゐる。

否な、むしろ苦々しきまでの迷信を内包するでなければ、小市民的フィルムは製作され得ないが如くにさへ思はしむるものがあるではないか？

そこへ行くと、ソヴェート映畫はすつきりした爽快さを感じしむるものがある。如何にも親切に、宗教的愚昧・迷信の全カラクリを、具體的に、如實に暴露して行くのだ。そこにソヴェート映畫の手法があると云へやう。それは宣傳と云ふよりは、むしろ教育である。それは廣汎なる文盲退治に基く、必然的・隨伴的な大衆教化であらねばならぬ。

實際、ソヴェート同盟に於ては、フィルムは教育人民委員會(文部省)の管掌するところ

のものであつて、それはラヂオ、新聞、雑誌、書籍等々と共に國民教育の全體制の中に一つの重要な地位を占むるものである。

一九二八—二九年度から始められた、かの五ヶ年計畫に於ても、勿論フィルム製作は、社會主義的文化建設に於ける重要な一つのテーマになつてゐる。今その最初の製作成績を示すならば次の如くである。

一九二八—二九年

一萬二千本

一九二九—三〇年

一萬三千本

このフィルム製作の増加は、次年度以後に於て益々發展せしめられたであらうことは、多言を要しないであらう。

かうした急テンポの文化建設の線に沿ふて、常に迷信退治、反宗教宣傳が、フィルムを通じて廣汎に行はれつゝあると云ふことは、けだし注目すべきことであらねばならぬ。

そこで私は、私の實際に見たソヴェート映畫の中から、特に反宗教宣傳が印象的になされてゐたと思ふものを二つ三つ取り出して、少しばかり述べて見ようと思ふ。

先づその第一は、プロウキンの作品「アジアの嵐」である。

このフキルムは一九三〇年に日本でも広く上映されたものであるが、私は一九二九年、まだヨーロッパに居た當時、巴里はシャンゼリゼーのテアトル・デュ・コリゼーで、その封切りを見たものであつた。

その大體の筋は、かうだ――

「一九二〇年の始め、ヨーロッパ大戦の打撃を受けた資本主義の世界各國は、その經濟打開策に狂奔してゐた。この時、アジアの未開の地、蒙古がその廣大なる土地を擁して眠つてゐた。これが我利我利亡者の帝國主義者どもの眼に如何に映つたか？

彼等はあらゆる手段を以つてこの好餌を己の手中に收めやうと努める――彼等蒙古土民の魔睡劑である宗教（ラマ教？）を利用することによつて、勿論又彼等の最後の武器、軍隊を使ふことによつて――。だが、一方に於て、この時既に、この蒙古の地の一角に、鬪争の旗が押し進められた。さうして××的×衛軍と、帝國主義どもの軍隊とが激しく戦鬪

する。嵐、嵐！……」

この場合、帝國主義者どもが宗教をその支配の用具として利用しやうとするカラクリが非常に成功的に、そして極めてチビカルに現はされてゐる。それと共に、チムールのおやぢが死病で苦しんでゐる時、ラマ僧がやつて來て祈禱をする。その馬鹿馬鹿しさを巧妙に暴露せしめてゐる。(此の點は特に一九三一年三月新築地が築地小劇場で上演した脚本ではより高調されてゐた。そして強慾な僧侶は叩き出されてしまふのであつた)。

このフキルムは當時パリでは非常な人氣であつた。普通は一週間で終る上映も、このフキルムのみは、幾週間もこの同じコリゼーで續映されてゐた。(それに監督が主役が、巴里にやつて來ると云ふので、大變な人氣であつた)。

フランスで持てた理由の一つは、モデルになつてゐるイギリス帝國主義者の慘敗に對する皮肉な微笑によるものであらう。殖民戰に於ける敵對者イギリスの敗北は、フランスにとつて愉快なことであるに違ひない。従つて、それに引きかへ、イギリスでは、このフキルムは斷然、禁止されたと云ふことだつた。

日本でも、このフィルムは、國家主義者からも、また帝國主義者からも、異つた觀點からではあらうが、歓迎されたと云ふことであつた。

三

次は「新しきものと古きもの」即ち一名「全線」がそれである。これは名監督エイゼンsteinの作品である。

これは、古い個別的な農村生活から、新しい共同的な農村生活、即ちコルホーズへの道を、全面的に示したものである。

即ちそれは輝しきソヴェート五ヶ年計劃の實況をバックとして製作されたものである。

このフィルムでは、早魃に苦しむ農民が、雨乞ひをするため僧侶の指導下に、盛大な宗教的儀式を行ふ。汗みどろになつて老若男女が、人間も動物もが、小丘の頂にまで長き行列をする。祭壇はしつらへられ、ローソクはやけに燃えてゐる。聖僧の祈禱も終つて、やをら！ と云ふ段になる。然るに「忽ちにして天の一角に……」と云ふ奇瑞は、一寸も現れて來ない。

かくて無知なムジーク、農民たちも、かうして宗教の全く頼るべからざることを知る。

これに對立せしめられてゐるのが、巨大な現代科學の力だ。新式の牛乳精製機、それから新式のトラクター、新しい農村共同住宅!!

凡てのソヴェート農村は、古い殻を引き離して、新しい共同化への道を刻々に進めて行く!
く!

トラクターの目ざましい縦隊!!

かうして、この映畫では宗教的愚昧に對して、可なりの痛撃が加へられてゐる。

四

その三は、一九三一年七月、東京で見たドヴンエンの作品「大地」である。

これはソヴェート・ウクライナの農村を舞臺にしたものだ。こゝでも古きものと新しきものとの抗爭がある。老いたるものはまだく舊弊を墨守しやうとする。しかし鍛へ上げられたソヴェート青年は、片つぱしからそれを打ち碎いて行く。

父と子との相剋!!

このフィルムでは、大して反宗教宣傳は取り入れられてゐない。だが、宗教的愚昧は、初めに完全に擲揄されてゐる。

善良な一人の老農夫が靜かに死んで行く。天國へ行つたか、地獄へ行つたかの便りをするとの約束によつて、その友人の老農夫は、毎日墓場へ行つて死骸を埋めた土まんぢうに耳をあてて、その便りを今か今かと待ちあぐんでゐる。

新時代の子供たちが、ピオニールたちが、このぢいさんを散々からかふのだ。

かうしたエピソードを持つてこのフィルムは、新式のトラクターの到着による古い農村の共同化への道を追つて行くのである。

五

かうした具合に、ソヴェート映畫は、多かれ少かれ、反宗教宣傳を取り入れてゐる。

ソヴェートの新しい生活は、この反宗教的出來事を抜きにしては、理解されないのである。ツァール時代の舊制度下に於てむしろ馬鹿々々しい程の宗教的愚昧が支配してゐたロシアに於ては、その文盲退治の仕事と共に、あらゆる迷信、あらゆる宗教的蒙愚を一掃し

なければならぬのである。

そのことは、新しき五ヶ年計劃による社會主義建設に伴ふて絶対に必要なこととなつてゐるのである。

新しい醫療法の普及のためには、かの怪しげな、まじないや祈禱水の飲用を禁止しなければならぬ。それは民衆保健上、傳染病防止などの觀點からしても、絶対に必要なことである。

新しい農作法を發展せしむるためには雨乞ひ祭の如きものへの信賴を失はしめねばならぬ。

だが、かうした馬鹿々々しいことが、實際、ツアール治下のロシアではない、現に我が日本でも行はれてゐるではないか？

所謂「宗教本質論」なるものによつて、かうした迷信、愚昧を抜きにした、そんなものに係りが無い、眞の宗教、誰れか云つた「第一義的宗教」なるものを呼揚せんとする人々もある。

だが一體、歴史的に、また社會的に、教團のない、従つて經濟的搾取を伴はない、宗教なるものが存在し得たかどうか？ また現存してゐるかどうか？

斷じて否！ である。

思辨的觀想も、個人の思惟たることを止め、社會的宣傳の手段を経て、集合思惟の形態に入る時、それは正しく一個のねむり薬でしかなくなる。

それは終局に於て、最も原始的な形態の宗教的愚昧、迷信と五十歩、百歩のものとなる。その機能に於ては、正しく同じであらねばならぬ。

ソヴェート映畫が、最も解り易い形態を把えて、宗教的愚昧、迷信をやつゝけてゐるのは、百パーセントの宣傳價值を持つものと云はねばならない。

×

尙ほ一九三二年春、日本でも封切された「人生案内」に於ては、昔しの大寺院が今は既に不良少年を收容する「労働コンミュン」に改造されてしまつてゐる。そこに吾々はソヴェートの寺院處分法の一例を發見することが出來よう。

第四章 反宗教運動の國際化——プロレタリア

自由思想家インタナショナル

一、その起原

反宗教運動は、今や世界的な波をのた打ち返してゐる。即ちそれはマルクス主義的世界觀の下に、強力な國際的運動として、プロレタリアートの世界的解放の一翼をなしてゐる。

而して、かかる國際運動の中心團體こそは、プロレタリア自由思想家インタナショナル (La Internacio de la Proletaj Liberpensuloj) なのである。

此のインタナショナルは、一九二五年に、チエツコ・スロヴァキアのチエプリツ市に於ける大會に於て創立されたものである。

この大會は、プロレタリアートの反宗教運動が、「偉大なる社會主義運動の一部分である」ことを規定した。そして此の新生のインタナショナルは、「如何なる宗教的イデオロギーと

も兩立し得ないところのマルクス主義の地盤の上に立脚する」ものであることを宣言した。茲に此の運動の重點があることは多言を要すまい。

二、その進展

此のインタナショナルの第二回大會は、一九二五年十二月、ライプチヒで開催された。そして第一回大會に於けると同じく、ブルツセル派のブルジョア的な無神論者インタナショナルの排撃を決議した。

第三回大會は、一九二八年一月、ケルンに於いて開催された。この大會では、オーストリア、ドイツ、デンマルク、ベルギー、フランス、ソヴェート同盟、チエツコ・スロヴァキヤ、ポーランド、アメリカ合衆國に於けるプロレタリア無神論者團體を結合して、大勢力となつた。これらの諸團體の中で、最も有力なものは、云ふまでもなくソヴェート同盟の戰闘的無神論者同盟であるが、その他の有力なものとしては、六十萬の會員を持ち、創立二十六年の歴史を有つドイツの團體、四萬人の會員を持つオーストリアの團體、二萬五

千人の會員を持つチエツコ・スロバキアの團體、等々であつた。

ところで茲に注意すべきことは、反宗教運動の戦線内に於ても、共產主義と社會民主主義との對立を生じたことである。ドイツ、オーストリア、チエツコ・スロヴァキヤ等の加盟團體内に於ては、主として社會民主主義者が指導權を握つてゐた。彼等は宗教に對して眞にプロレタリア的な鬭争を行ふことなく、むしろ政府と教會との提携を承認し、ローマ法王の「反ソヴェート十字軍」に對しても、何ら積極的な大衆的抗議を組織し得なかつた。また進んで組織しようとしなかつた。従つて、さうした状態の下では、革命的反對派が結成されるのは當然のことであらねばならぬ。即ち革命的反對派は、教會及びフアツシヨ攻勢に對する逆襲、ソヴェート同盟の擁護の鬭争を要求した。ところが社會民主主義者たちは、反對派の此の運動に對して、除名を以つて答へた。例へば、ドイツでは、六萬五千人の會員を除名した。

然し、此の一九二八年一月のケルン會議では、左翼が多數を占め、文化反動、戦争の危険に對する鬭争、労働者の宗教的去勢に對する鬭争が、國際同盟の當面の任務として決定

された。プロレタリア自由思想家インタナショナル執行委員會内に於ける社會民主主義者及び議長ハルトウイヒは、ケルン會議の正しい決議をサボタージュしたのみでなく、これに對して鬭争をすら開始した。例へば、ケルン會議の直後ウィーンで開かれたオーストリア無神論者大會に於て、彼はケルン會議の決議は「非マルクス主義的」であると云つて非難した。これと同じ策動が、ドイツ、チエツコ・スロバキヤの會合に於ても行はれた。彼は反宗教運動は、超黨派的であると主張しながら、内密に社會民主黨の政策を持ち込んだのであつた。

一九三〇年四月には、ハルトウイヒは、更にチエツコ・スロヴァキヤの革命的無神論者團體たる『スヴァズ』を、インタナショナルから除名し、次いで數ヶ月後には、スキス及びフランスの加盟團體をも、除名してしまつた。かくして社會民主主義者たちは、インタナショナルを分裂させ、眞に革命的なプロレタリア分子を壓迫しつつ、ブルツセル派のブルジョア自由思想家インタナショナルと野合するための商議をすすめた。(註)

(註) 當時の狀勢に就ては、ルナチヤルスキーの論文「プロレタリア自由思想家インタナシヨナ

ルの状勢」(「インプレコル」フランス版、一九三〇年八月九日號)を見よ。(本書の卷末に譯載す)。

×

かかる状勢下に、プロレタリア自由思想家インタナショナルは、その第四回大會を、一九三〇年十一月十五、十六の兩日、チエツコ・スロヴァキヤのボーデンバツハに開催した。

此の大會には、オーストリア、ドイツ、ソヴェート同盟、ポーランド、ベルギー及びチエツコ・スロヴァキヤの代議員が出席し、その外、ハルトウイヒによつて除名されたチエツコ・スロヴァキヤの革命的左翼、スキス、フランスの代表、十萬の會員を持つドイツの左翼反對派、オーストリアの反對派の代表も參加した。ベルギー、ポーランド、ソヴェート同盟などの加盟團體の代表は、革命的左翼の名に於て、除名された團體及びドイツの團體の代表が決議權を持つて大會に出席することを要求した。しかし全て此等の要求は、社會民主主義者によつて、ファシスト的手段をもつて拒否された。そこで、ソヴェート同盟、チエツコ・スロヴァキヤ、スキス、ポーランドの加盟團體、ドイツの反對派、フランスの革命的無神論者同盟、ベルギーの無神論者同盟によつて、裏切者ハルトウイヒ、ジーヴェ

ルス、ロンツアル、レーベンハルト等を除名して、大會を續行した。

かくして、國際的反宗教運動は、今や明かに二つの對立する潮流を進んでゐるのである。

三、その現勢と各國支部

プロレタリア自由思想家インタナショナル (I.P.F.) の本部は、目下ベルリン (Berlin, C 25, Münzstr. 24) にあつて、機關紙『プロレタリア自由思想家の聲』(Proletarische Freidenkerstimme) を出してゐる。そして國際的結合に努力してゐる。

ドイツの同盟は、『自由思想家』(Freidenker) なる機關紙を持つてゐる。

フランス支部たる『革命的自由思想家聯盟』(Union Fédérale des Libres Penseurs Révolutionnaires de France) では、『プロレタリア・反宗教・鬭争』(La Lutte anti-religieuse et prolétarienne) が、毎月機關紙として發行されてゐる。

ベルギーでは、ベルギー唯物論者同盟(プロレタリア自由思想)の月刊機關紙として、一九三一年四月二十日、『プロレタリア思想』(La Pensée prolétarienne) が創刊された。

その他、ソヴェート同盟は、前述した通り、極めて活潑な運動をなして居り、多くの機關紙、宣傳紙を持つてゐる。また、スウェーデン、オーストリア、オランダ、チエツコ・スロヴァキヤ、ポーランド、ギリシヤ、メキシコ、蒙古などの各支部も、其々、同じ潮流の反宗教運動を押し進めてゐる。

尙ほ、各殖民地に於ける反宗教運動が、特殊な關心を持つて遂行されんとしてゐることも、注意すべきことであらう。

最後に、日本に於ける反宗教運動に就ては、章を改めて述べたいと思ふ。

第五章 日本に於ける反宗教運動

一、序 説

吾々は既に長々しく、無神論の史的発展、並びにその實踐的な現れとしての反宗教運動の潮流を、全世界的視野に立つて眺め來り、最後に今や愈々、日本に於ける反宗教運動を瞥見すべき場所に達したのである。

日本に於ける反宗教運動は、全く國際的運動の一環として現れてゐるものであることは云ふまでもないことであるが、そこには尙ほ若干の日本の特殊性があることも忘れてはならない。

日本の宗教が、ヨーロッパやアメリカのように、單にキリスト教でない點は勿論、それ以外に、否な其れに遙かに優つて多くの佛敎的諸要素が存在してゐる點や、尙ほ日本固有の民族的宗教としての神道が存續してゐることなどは、日本の反宗教カンパニヤに於いて

可なりに注意さるべき特殊状態であらねばならぬ。

明治維新の際、ブルジョア的な反宗教運動として謂はゆる『廢佛毀釋』なるものがあつた。しかし結局、それは不徹底なものに終つてしまつた。そして今日になつても尙ほ『境内地還附』の問題がむし返へされてゐる。そして佛教々團の反動化が、正にそれに正比例せんとしてゐるのである。

日本に於けるプロレタリア的反宗教運動は、全く世界大戰以後のことに屬する(註)。かの水平社運動の特に初期に於ける本願寺に對する募財拒絶運動や、第一回普選に於て寺院閉鎖を末寺に達示した東本願寺に對する勞農黨の抗議や、さては農民組合や勞働組合の募財拒絶運動、等々の斷片的な運動が、行はれてゐた。然し全般的な反宗教運動は、極めて最近の日附に屬する。それは實に一九三一年の前半からである。

(註) それ以前としては、明治四十年二月十七日、日本社會黨第二回大會に於ける決議案に、黨員の隨意運動の一つとして『非宗教運動』を通過せしめてゐる位ひのものであらう。

無神論の議論も、既に早く一、二の論客によつてはなされてゐたが、マルクス主義宗教

論が、本舞臺に乗り出して來たのは、一九二九年から、一九三〇年にかけてであつたらう。而して、かかる理論闘争は、やがて物體化の過程を辿り、一九三一年に至り、いよいよ「反宗教闘争同盟準備會」なるものが成立した。

二、反宗教闘争同盟準備會

一九三一年三月に至り、反宗教闘争同盟準備會は、その産聲を擧げた。雑誌『プロレタリア科學』の如きは、特に『反宗教運動の頁』を設けて、此の新生の準備會を助けた。

次いで、準備會は、五月二十三日、第一回の宣傳演說會を、上野の自治會館で開催し、時節柄、非常な反響をまき起した。反宗教闘争は、一時、ジャーナリズムの寵兒とさへなつた觀があつた。

然らば、此の反宗教闘争は、如何なる内容を持つものであるのか？ 吾々は當時發表された同盟準備會の暫定『行動綱領』（草案）によつて、その理解に資せよう。即ち、それは次の如き四十七の項目から成るものであつた。

- 一、あらゆる教科書より一切の宗教的宣傳記事の削除
- 二、學校におけるフアシズム教育の排撃
- 三、兒童の宗教的情操教育の排撃
- 四、××寺院への學生生徒の參拜強要反對
- 五、宗教學生の反宗教運動參加の自由
- 六、各種學校に於ける宗教科又は學生宗教團體の廢止
- 七、一切の宗教學校の廢止
- 八、工場布教絶對反對
- 九、工場内の佛壇、神社、禮拜所の即時撤廢
- 十、工場内の一切の宗教的修養團の排撃
- 十一、工場内に於ける宗教的修養雜誌の配布及び購買勸誘強要絶對反對
- 十二、宗教的祭禮に名をかる工場労働者の慰安會、旅行、遠足、等々反對
- 十三、軍隊、刑務所、在郷軍人會、青年團、處女會、青年訓練所、等々に於ける布教絶對反對
- 十四、社會事業（救民、救養、授産、職業紹介、宿泊所、簡易食堂、人事相談所、感化院等）に名をかる一切の宗教的宣傳の排撃
- 十五、教團所屬財團設立維持反對

十六、あらゆる色彩の宗教的反動的教化團體の排撃

十七、一切の宗教的教化運動の排撃

十八、加持・祈禱、及び一切の宗教的醫療反對、無産者診療所の支持擴大強化

十九、あらゆる神符、護符の拒否

二十、一切の聖像、偶像の禮拜反對

二十一、一切の迷信及び宗教的慣習の徹底的打破、科學思想の普及

二十二、宗教的募財、寄附の徹底的拒絶

二十三、教團による營利事業反對

二十四、宗教的婚禮、儀式、葬儀、及び一切の宗教的年中行事排撃

二十五、反宗教的勞働者農民葬の舉行普及

二十六、宗教的祝祭日・記念日に代はる勞働者農民の祝祭日・記念日（メーデー、三・一五記念日、

四・一六記念日、八・一デー、十月革命記念日、等々）の普及擴大

二十七、宗教的青年會、婦人會、處女會、宗教的日曜學校の撲滅

二十八、宗教的文藝、映畫、演劇、音樂、ラヂオの排撃

二十九、スポーツによる宗教宣傳絶對反對

三十、プロレタリア藝術、プロレタリア娛樂、及び赤色スポーツの宣傳普及

三十一、國家による宗教統制擁護の撤廢

三十二、社寺に對する國家及び地方自治團體の經濟的補助の廢止

三十三、新興宗教を名乗る一切の偽瞞的宗教運動に對する徹底的抗爭

三十四、世界宗教平和會議絶對反對

三十五、社寺、境内、及び附帶地の勞働者農民への無償解放

三十六、社寺、教會、説教所を勞働者農民の集會に利用する自由の獲得

三十七、社寺所有地の小作料全免のための闘争

三十八、反宗教運動に關する一切の言論出版集會の自由の獲得

三十九、反宗教運動者の監禁、逮捕絶對反對

四十、帝國主義のお先棒たる殖民地 \parallel 海外布教絶對反對

四十一、あらゆる形態の宗教撲滅

四十二、社會民主主義的似而非反宗教運動との徹底的抗爭

四十三、一切の文化反動並びにファシズム、社會ファシズムに對する闘争

四十四、マルクス \parallel レーニン主義世界觀の普及擴大

四十五、反ソヴェート十字軍打倒

四十六、帝國主義 \times \times 絶對反對

×

六月に至つて、準備會は月刊の機關雜誌たる『反宗教鬭争』を創刊した。(本誌は毎號發禁に遭ひ、八月號の第三號を以つて解消した)。

準備會は八月に、夏期巡回宣傳講演會を組織し、山梨、長野、新潟、富山、岐阜、愛知、京都、大阪、奈良、兵庫、三重の各府縣に轉戦した。

かくして、いよいよ九月二十日、反宗教鬭争同盟全國結成大會が築地小劇場で持たれることになつた。だが、その結成大會は、秋田氏が開會の辭を述べようとするや否や、直ちに中止解散を命ぜられてしまつた。

次いで翌二十一日、上野の自治會館に開かれた演說會も、「演說會を大會に変更すると云ふ」動議がなされるや否や、直ちに中止解散を命ぜられた。だが、その刹那「オレ達は茲に日本××的××論者同盟を結成する」との絶叫が、満場の聴衆によつて拍手を以つて應ぜられた。かくして、これこそプロレタリア自由思想家インタナショナルの日本支部たる

べきものであらう。

三、日本反宗教同盟

これは高津正道君を中心とする云はば社會民主主義的反宗教運動であつて、かのプロレタリア自由思想家インタナショナルに於ける社會民主主義者ハルトウイヒやジーヴェルスの運動と同じ性質のものであつて、これに對しては、宗教家の方面からも可なり甘く見くびつた批評をしてゐる人がある。

この同盟の準備會は、一九三一年四月に組織され、十月一日に機關紙『反宗教』を創刊し、十月一日、上野の自治會館で『淋しい』結成大會を持ち、無事に同盟を成立せしめた。

此の同盟のスローガンとして掲げられてゐるものは、次の如きものである。

一、あらゆる形態の宗教打倒

二、科學的社會觀の強調普及

三、宗教的社會主義運動の排撃

四、宗教的醫療及び募財絶對反對

五、工場及び其他の團體布教絶對反對

六、宗教的修養團の撲滅

七、政治と宗教との結托絶對反對

だが、これらのお題目が、社會民主主義的方法によつて、どれだけ實現されるかは、甚だ疑はしいものとされてゐる。

四、結言——今後の展望

吾々は茲に此の貧しい調査研究を終るに當り、數言、結びの言葉として、今後の展望を試みたいと思ふ。

嘗つてエンゲルスが明かに指摘した如く、如何なる宗教と雖も、『宗教は一旦形成されると、常に傳統的な實材を包含して居り、そして云ふまでもなく傳統なるものは、イデオロギ―の一切の領域に於て、一個の大きな保守的力となる』(フオイエルバツハ論)。

かうした保守的力としての宗教は、従つて新興プロレタリアートに對して、常に敵對的な存在となる。このことは、特に現時の日本に於ける文化反動に就ても、極めて明かに現

れてゐるものである。かくして、プロレタリアートの反宗教運動は、その最後の日まで闘ひ抜かれる運命下にあるものである。尙ほ宗教的愚昧性は、現代科學の飛躍的發展によつて、次第／＼に、必然的に解消せしめられるであらう。

かくして、日本に於ても、將來、ソヴェートの宗教清算の時期が到達するのではないかと思はれる。今日の宗教團體なるものは、それ自身、一個の反社會的存在たらんとしてゐる以上、かの寺院清算の運動も、やがて事實となつて現れる時期があり得るだらう。そして戰鬪的プロレタリアートは、そのために闘ひ續けて行くであらう。即ち、かかる鬪争の持續こそは、正しく新しき世界史の創造である。

×

だが尙ほ、冷靜に再考せねばならぬ一つの問題がある。即ち、全體としての宗教現象が、果して人間の世界から全部的に姿を消すであらうかどうかの問題である。

既に吾々の見た如く、マルクス主義によれば、將來の宗教は、自然消滅すべき運命下にあるものである。即ち宗教は現實的苦難の反映なるが故に、社會變革によつて新社會が創

造さるれば、現實的苦難は消滅し、従つてその反映たる宗教も亦必然的に消失すると云はれてゐる。だが、人間生活に於ける現實的苦難は、かかる新社會に於ても亦、何らかの形態に於て、存在するであらうことは、想像するに難くなからう。かかる場合、吾々は再び幾多の人生問題に悩むであらう。かくして吾々は廣い意味に於ける現實的苦難を悩むことから全く自由になることは有り得ないであらう。

附録　プロレタリア自由思想家

インタナショナルの状勢

ア・ルナチヤルスキー

以下の一文は「インプレコル」(フランス版)一九三〇年八月九日號(第十年、六十七號、八五二―八五三頁)に投載されたものである。少し古いと云へば云へるが、日本の現段階に對しても可なり重要な内容と暗示とを持つ一文献であることを疑はぬ。

×

プロレタリア自由思想家運動は、資本主義に對するプロレタリア階級の闘争の多くの防禦地域の一つである。階級運動の全體の中に起つた所のものは、其の防禦區域の各々に反響するものである。従つて、イデオロギーの領域に於ても、階級闘争は非常に重大なるが故に、この自由思想家の運動は大いに重大である。若し、一般階級闘争や、政治的權力に

對する鬭争或は經濟鬭争の諸問題に於て、吾々が社會民主主義的首領どもの勞働階級に對する公然の裏切りを認めるならば、プロレタリア自由思想家の運動たる鬭争のイデオロギ―的領域に於て、それと同じ裏切りが、即ち社會ファシスト的政策が、現れてゐると云ふことは、少しも驚くべきことではない。

プロレタリア自由思想家インタナショナルの社會民主主義的首領たちにとつては、一九二五年に採用された行動綱領、即ち無神論のための××的プロレタリアートの鬭争の綱領及び『方針』は、『餘りに××的』で許容し得べからざるものである。かくしてプロレタリア自由思想家インタナショナルの××的分子が此の『方針』の適用のために鬭争する間に、社會民主主義的首領達は、あらゆる方法を以て其れに抵抗した。プロレタリア自由思想家インタナショナルの綱領を棄てるのは、左翼分子ではなくして、プロレタリア自由思想家たちの強力な運動を日和見主義と不活潑性との泥沼の中に埋没せしめんと熱中してゐる所の改良主義者たちである。左翼の代表者たちは、かかる傾向に對して戦ひ、且つ改良主義的首領たちの戦術と政策とを暴露する。そこから彼等の憎惡が、また其處からプロレタリ

ア自由思想家インタナショナルの諸隊伍に於ける全批判を窒息せしめんとする努力が、また其處から鬭争團體たるプロレタリア自由思想家インタナショナルを葬儀組合や田舎の御祭りの組合の類に變化せしめやうと望んでゐる所の社會民主主義の首領どもの政策に對して鬭争する所の凡ての人々を除外せんとする彼等の政策が由來するのだ。ドイツに於ては全地方團體中から、六萬五千人の同志が除名されたのだ。

しかし、社會民主主義者の指導は、各國支部を分裂せしむるだけでは満足しないで、その分裂政策を國際的段階にまで應用する。かくしてプロレタリア自由思想家インタナショナルの執行委員長たるハルトウイヒ教授は、チエツコ・スロバキヤのプロレタリア自由思想家聯盟たる『スヴァズ』(Svaz)が、その負擔金を支拂はなかつたとの理由で、二萬五千人を除名した。プロレタリア自由思想家の幾千萬の大衆は、この教授にとつては、如何に下らないものであらうか？ プロレタリア自由思想家の運動の一致は、彼に對してどんな關係があるのか？

『スヴァズ』の除名、及びその代表者たる同志ベランのプロレタリア自由思想家インタナショナル執行委員会からの迫奪は、同様に委員会及び最近の大会に於て多数を確保せんと欲する右翼によつてなされた横暴・残忍な奸計である。ハルトウイヒ及びジークヴェルスは、彼等の除名政策を繼續せんとの意志を有し、そして其の事を決して陰蔽しない。かくしてジークヴェルスは、一九三〇年六月十六日及び十七日の兩日、ウイーンに於て開催された委員会會議に於て、大会に於ては改良主義者が大多数を得て、少數派は屈服するか又は辭任する外は無からうと宣言した。そしてジークヴェルスの忠實な影武者であり、雑誌『無神論者』に於ける彼のペンであり代辯者である所のハルトウイヒは、彼等（改良主義者たち）は共産主義者と共には何事をも爲さないし、また彼等は何等共通の言葉を持たない、等々と書いてゐる。

ハルトウイヒ及びジークヴェルス一派は、マルクス主義の諸原理及びプロレタリア自由思想家インタナショナルの決議や『方針』を勇敢に守る所の××的左翼分子に對して、激烈な戦ひを指し向ける。ハルトウイヒ及びジークヴェルス一派は、自由思想家達は少しも黨

の目的を追求しないと云ふこと、即ち自由思想家たちの運動に於ては、彼等は社會民主主義的政策を實行しないで、彼等の政策のみしか實行しないと云ふこと、を宣言することによつて、勤勞大衆を混亂せしめんと試みる。其處に最惡のデマゴグとハツキリした神祕化とがあるのだ。このことを疑ふ人は、一九三〇年五月の『自由思想家』紙上に於て、ドイツ自由思想家聯盟の大會でなされた挨拶演説中、ドイツ社會民主黨ベルリン地區代表者クンストラーによつて發表された宣言を讀まれんことを希望する。即ち同紙に曰く――

『同志クンストラーは、彼の挨拶演説中で、ドイツ社會民主黨ベルリン地方支部と自由思想家聯盟との間に現存せる誠實な友誼的諸關係に就て力説してゐる。自由思想家の勝利はまた黨の勝利でもある。吾等は常にかくあらんことを望む。』

明かに、ドイツ社會民主黨は、反宗教戰線に於て、大勝利を博することを決して希望して居なかつた。尙ほカトリック中央黨――ローマ法王との和親條約コンコルダートのために投票し、且つ其の理論はマルクス主義とカトリック教とを結合せんとする（例へばドートマン、ゲオルグ・バイヤー）所の――と協力してゐる社會民主黨が、どうして其のことをなし得やうか？

しかしながら、左翼に對して鬭争するところの社會民主主義的首領どもは、好んでブルジョア自由思想家どもと意氣投合するのだ。嘗つては、この同じ社會民主黨の首領共が、ブルジョア自由思想家たちの組織せるブルツセルの第二インタナショナルからの脱退、及びプロレタリア自由思想家の自治的組織の創始を、プロレタリア・イデオロギーの最も偉大な勝利として特質づけた時代があつたのだ。しかし爾來、時勢は變つた。ジーヴェルス及びハルトウイヒ派は、右翼への突然的な方向轉換をなした。ハルトウイヒは、××的言辭の陰にかくれて、おまけに歪曲して解釋されたレーニンの語句まで引用しながら、ブルジョア・インタナショナルと合流することが有利であり、且つ必要であると書いた。ジーヴェルスは今年（一九三〇年）の四月に於けるドイツ自由思想家聯盟の大會に於て、次の如く述べた。

『ブルツセル・インタナショナルとの軋轢は、清算されねばならない。吾々はプロレタリア自由思想家インタナショナルと完全な協調を保ちつゝ、自由思想家の二つの國際團體の融合に關して、フランス及びベルギーの同志たちと確實に二週間以内に商議する所が

あるであらう。』

而してジューヴェルスは、ブルジョア自由思想家インタナショナルと商議するため、ブルツセルに赴いた。この商議の後、ブルツセル・インタナショナルの首領は、ジューヴェルスと彼との間の交渉は兩者の完全な一致を示し、従つて最早や總ゆる組織の融合に反対する何等の障礙もないと云ふことを確證する一宣告を公表した。

ブルツセル・インタナショナルへ加入せる最も大きい團體はフランスとベルギーとにあると云ふ事實にも拘らず、ジューヴェルスは此の商議の途上で之れら兩國の如何なるプロレタリア團體にも觸れなかつた。フランスのプロレタリア自由思想家團體は、經驗の不足からして、彼等の階級に關係のないブルジョア團體の中で困惑せる労働者たちの間で働いてゐる。そして其等の労働者をプロレタリアートの陣營に獲得せんと努力してゐる。それはその性質そのものによつて、ブルジョア・インタナショナルがプロレタリア自由思想家運動にとつて敵であると云ふことを労働者に向つて證明する。ブルジョア自由思想家たちはマルクス主義に對して戦ひ、階級闘争が歴史的發展の積極的な力であることを否定し、自

由主義的辯明をなして、プロレタリア階級の意識を曖昧ならしめることにしか役立たない。茲に於てか、ジーヴェルスは、ブルジョア自由思想家とプロレタリア自由思想家との間に何等原理的な矛盾がないと宣言する。すべて此等のことは、執行委員會が其れを議題に上すことなく、且つ彼に交渉を委任したことから結果したのである。ただ、ジーヴェルスはハルトウイヒの同意を得ただけであつた。

執行委員會のウイーンに於ける最後の會議に於けるその「報告」の中で、ハルトウイヒは、ジーヴェルスのこの奸計に就て一言も注意して居ない。そして若し、左翼の首領が此の「健忘症」の會長に、人々がプロレタリア自由思想家インタナショナルと結婚させやうと思つてゐるブルツセルの花嫁の存在を思ひ出させなかつたならば、總てのことは忘れられて仕舞つたであらう。

プロレタリア自由思想家インタナショナルの理論的活動はその團體的活動に絶對的に依存する。貧弱なる成長、これが此の領域に於けるプロレタリア自由思想家インタナショナルの活動を特色づけるものである。而して若し人あつて、若干の活動をなさんと決心する

ならば、その活動は反動の刻印を捺されるのである。プロレタリア自由思想家インタナショナルの執行委員會は、惡臭を發散しつつある法王及び其他の諸宗教の反ソヴェート・カトニパニヤに對して大衆の廣汎なるカンパニヤを組織するの必要を未だ信じなかつた。カトリック教會こそは、資本家的利潤のためにする宗教の搾取の典型的の實例なのだ。この實例の助けによつて、勤勞者大衆に對して宗教は資本主義の發生及びその死滅に密接に關係してゐると云ふことを容易に示し得るのだ。そして若しジューヴェルスが反ソヴェート・カニパニヤに於て戰つたとしても、それは法王の榮譽に對して抗議したのではなかつた。彼の機關誌に、彼はイルマ・ペトロヴァとか云ふ者の一文を發表してゐる。この論文は、法王の鬭争と何等異るところがないのだ。反對に、彼は、多くの誹謗を創造するため、變態的幻想に充ち満ちてゐて、未だ大變に怒りつぽいのだ（『フライデンカー』第四號を見よ）。

執行委員長ハルトウイヒは、このジューヴェルスの十字軍に對して、何事も計畫しなかつた。最近の會議に於て、彼は、ソヴェート同盟の無神論者聯盟が同じくドイツ自由思想家聯盟の活動を批判した文を書いた爲に、ジューヴェルスはローマ法王上諭第二號を發行する

の権利があると云ふことを確認して、同じくジューヴェルスを保護した。

x

執行委員會の六月十六日及び十七日の會議に於て、左翼（ソヴェート同盟、ポーランド、フランスの各團體の代表者たち）は、ハルトウイヒの策略に引つかかつて、少數となつた。ハルトウイヒとジューヴェルスとは、トロツキー一派の手中に在るベルギーの「唯物論者聯盟」の代表者バラバノーヴァ夫人自身に援助を求めた。バラバノーヴァ夫人は、ベルギーに於ける此の運動の永久的・積極的協力者ではない。そして「唯物論者聯盟」は、彼女に委任する権利を持つてはゐない。これこそ、ハルトウイヒの云はゆる「偶然的」大多數なのだ。すべての原理上の問題に於ては、バラバノーヴァ夫人は、改良主義者たちと投票を共にした。左翼の猛烈な抗議を無視してハルトウイヒ及びジューヴェルスの多數黨は、チエッコ・スロバキアの團體「スヴァズ」をプロレタリア自由思想家インタナショナルから、又其の代表者、同志ベランを執行委員會から除名することを承認した。同様に、ドイツの聯盟の反對派の代表者、同志マインスは、三票對四票の差で、この會議に出席することを許

されなかつた。か様にして、プロレタリア自由思想家インタナショナルの社會民主主義的指導はジューヴェルスの指導に反對してゐる所の十萬のプロレタリア自由思想家を沈黙せしめんと欲したのだ。反對派の代表者たちが、第四回大會に出席することを許容せんとする提案も、握り潰されてしまつた。ハルトウイヒは、そのことに就て、非常に『憤慨』し、ために會議を速かに終結せしめんと努力した程であつた。重要なことは、プロレタリア自由思想家の全運動の注意を、次の點に引き附けることである。即ち、十萬のプロレタリア自由思想家たちは、今や全體的運動の外にあり、他の十萬の人々は、プロレタリア自由思想家インタナショナルに於て彼等の勢力を回復するため、頑強に鬭争してゐると云ふことである。然し乍ら、ハルトウイヒや其の仲間たちはそのことに就ては何事も知ること欲せず、十萬のプロレタリア自由思想家の代表者が發言權を持つて大會に参加することを許可するの提案が爲されたと云ふ單なる理由で、會議を終結せしめんと欲するのだ。

×

執行委員會の會議の結果は、どうであらうか？

執行委員會は、僧侶と教會との活動に

直接關係ある大事件が起るまで十ヶ月間も開催されなかつた。この狀勢の中にあつて、ハルトウイヒは何を云はんと欲したか？ 如何に××主義者たちはプロレタリア自由思想家インタナショナルの活動を批判するか、從つて如何に彼等をして沈黙せしめること、及びプロレタリア自由思想家インタナショナルから彼等を追放することが必要であるか、これこそ、ハルトウイヒが第四回國際大會のための準備的手段として、彼の『歴史的』報告の終末に於てなした所の提案である。そこにこそ一つの體系、即ち放逸な社會ファシストの體系があるのだ。

ハルトウイヒの後で、ソヴェート聯盟の自由思想家の代表者が演説し、次に新たにハルトウイヒ、ジークエルス、バラバノーバ、ランツアトル（オーストリア代表）等が演説した。そして時間がないと云ふ似而非理由の下に、フランス及びポーランドの××的聯盟の代表者たちは演説する許可が與へられなかつた。

議事日程の第二の點は、第四回大會の問題であつた。ハルトウイヒは、ポーデンバッツハ（チエツコ・スロバキア）に大會を召集せんことを提案した。ポーデンバッツハ

て選んだのは、偶然ではない。チエツコ・スロバキアの××的聯盟をプロレタリア自由思想家インタナショナルから除名して以來、ハルトウイヒはあらゆる犠牲を拂つて、チエツクの改良主義的聯盟の權威を發揚せんと苦心してゐる。そしてボーデンバツハこそは、實にその聯盟の根據地なのである。

ソヴェート同盟の戰鬪的無神論者聯盟の代表者は、次の大會の議事日程に、次の如き諸問題を提出せんことを提議した。即ち――

一、文化的反動及びファシズムの攻勢と、プロレタリア自由思想家インタナショナルの任務。

二、殖民地諸國に於ける教會の活動と、プロレタリア自由思想家インタナショナル。

三、プロレタリア自由思想家運動の××的團結のための鬪争。

四、ソヴェート同盟に於ける文化建設と、戰鬪的無神論者聯盟の役割。

ジーヴェルスの提案によつて、以上の諸問題は、ただノートがとられたに過ぎなかつた。

他の一提案――大會前に『無神論者』誌上並に各國支部の機關紙に於て討論を開始すると

云ふ提案——は全く抑壓されてしまつた。

××派の代表者たちは、プロレタリア自由思想家インタナショナルの社會ファシスト的指導者の分裂政策を嚴正に批判した一宣言を作るべき義務のあることを自覺した。次の大會に於ては××的左翼は、社會ファシストの分裂政策に對して、強力な鬭争を敢行するであらう。だが、既に今日、大會以前に、プロレタリア自由思想家運動の××的統一のための頑強な鬭争をなすことが問題となつてゐる。

無神論と反宗教運動



昭和七年七月十五日印刷
昭和七年七月三十日發行

定價金五十錢

送料金十錢

著作者 淺野 研真

刊行者 酒井 淳三

東京・小石川・西江戸川・卅一

刊行者 大 雄 閣

東京・小石川・西江戸川・卅一

振替東京 (六六九二九
六七一一七七)

電話 小石川 八三八

製本者

植木 龍藏

印刷者

大杉 直次郎

文學博士 高楠順次郎先生 著書目錄

第三十版
第十五版
第十二版
第十版
第三十五版
第十六版
第四版
第四版
第五版
第四版

生の實現としての佛教
宇宙の聲としての佛教
理智の泉としての佛教
人文の基調としての佛教
佛敎讀本
佛傳
見眞大師
ウパニシヤツトより佛教まで
人間學としての佛教
中等教科書 佛敎辭典

送	菊半截	定四六	送	菊	定大雄叢書	送	大雄叢書	送	四六	普四及六	送	菊半截	定四六	普四及六
料	價	版	料	價	版	料	價	書	料	價	版	料	價	版
金	三	金	四	金	五	金	金	金	金	一	金	金	一	金
十	五	一	七	四	七	二	二	一	一	二	八	五	三	三
貳	十	圓	十	圓	圓	五	五	十	十	十	十	十	十	十
錢	圓	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	圓	錢	錢	錢	圓	錢

大雄閣刊行書目録

最新刊書

松永材著 日本主義の論理 送料 七圓十錢

淺野研眞著 無神論と反宗教運動 送料 十五圓十錢

小林一郎著 佛陀の教 送料 十三圓二錢

オランダ原著 佛陀 送料 二十五圓十錢

木村泰賢、景山哲雄共譯 佛陀 送料 二十五圓十錢

アルフレッド・フシエ著 佛敎美術研究 送料 十三圓

白井成允著 善の實現 送料 十一圓二十錢

白井成允著 信仰とその反省 送料 十二圓

高楠順次郎編 法寶留影 送料 二十圓十錢

小野玄妙著 大乘佛敎藝術史の研究 送料 二十五圓十錢

シルヴァン・レグイ著 佛敎人文主義 送料 十一圓五十錢

山田龍城譯 佛敎人文主義 送料 十一圓五十錢

鈴木大拙著 隨筆 禪 送料 十二圓五十錢

鈴木大拙著 禪とは何ぞや

小野清一郎著 佛教と現代思想

岡本かの子著 散華抄

山崎精華著 佛陀をめぐるて

山内修謙著 明治傑僧秘談

淺野研眞著 社會現象としての宗教

江部鳴村著 隨筆蓮如

藤秀璋著 戲曲阿闍世王

大山公淳著 聲明の歴史及び音律

香取秀眞解説 斑鳩之餘光御物金塗銅灌頂幡

南條文雄著 懷舊錄

佐野甚之助タル著 創作ゴラ

大鹽毒山編 印度佛教史地圖並索引

送料價 十二圓九十錢

送料價 十一圓九十錢

送料價 十三圓

送料價 十二圓

送料價 十二圓

送料價 十一圓八十錢

送料價 十二圓

送料價 十二圓

送料價 三十一圓

送料價 八十二圓

送料價 十二圓

送料價 三十一圓八十錢

送料價 十二圓八十錢

今泉國太郎著	今泉國太郎著	末松謙澄譯註	末松謙澄譯註	末松謙澄譯註	長井眞琴著	前田利鎌著	三枝博音著	景山哲雄譯	景山哲雄譯	景山哲雄譯	景山哲雄譯	景山哲雄譯	景山哲雄譯	大鹽毒山編
會計法述義續編	會計法述義	羅馬法	羅馬法解說	帝國學士院御藏版羅馬法學提要	佛敎と人生	臨濟・莊子	認識論考	倫理の二つの根本問題	道德の形而上學	美の形而上學	充足根據の原理	天然の意志	支那佛敎史地圖並索引	
送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價	送定料價
十二圓五十錢	十二圓五十錢	二圓十錢	三圓十錢	三圓十錢	九圓十錢	十二圓十錢	十二圓十錢	十三圓十錢	十二圓五十錢	十三圓十錢	十三圓五十錢	十三圓十錢	十二圓八十錢	

大雄叢書

各冊定價二十錢・送料二錢

一 高楠 順次郎著

佛

傳

〔本輯 十五錢〕

二 宇井 伯壽著

根本佛

教

〔本輯 十五錢〕

三 木村 泰賢著

道徳の意義

義

〔本輯 十五錢〕

四 長井 眞琴著

佛敎の戒律

律

〔本輯 十五錢〕

五 赤沼 智善著

大乘運動の意義

義

〔本輯 十五錢〕

六 南條 文雄著

信の意義

義

〔本輯 十五錢〕

七 小野 玄妙著

佛像の概説

説

〔本輯 十五錢〕

八 羽溪 了諦著

佛敎の中心觀念

念

〔本輯 十五錢〕

九 土屋 詮教著

宗敎教育問題の歸結

結

〔本輯 十五錢〕

十 小野 清一郎著

社會理想としての淨土

土

〔本輯 十五錢〕

十一 ペッツォーロ 著

現代世界觀としての天台佛敎

敎

〔本輯 十五錢〕

十二 村上 專精著

思ひ出のまにまに

に

〔本輯 十五錢〕

十三 長井 眞琴著

親鸞聖人

人

〔本輯 十五錢〕

十四 高楠 順次郎著

見眞大師

師

〔本輯 十五錢〕

十五 深作 安文著

思想問題

題

〔本輯 十五錢〕

HIM

224



lorCard CameraCray.com

[115] mushinrontohansh008800

Library of Congress, Asian Division

11939045

880-01 Asano, Kenshin, 1898-1939

Mushiron to han shūkyō undō

00062272120
Jun 13, 2014

APRIL 2013

